

国語

➔ 中学年 | 「書くことの学習」

「見学したこと・調べたこと」を
新聞にまとめよう

○ 情報を活用する力を、「新聞づくり」で育む

最近では「情報活用能力の育成」といえば、社会科や総合学習の時間などに、「コンピュータを用いて調べ学習をすること」だと考えられてしまいがちです。しかし、本当に価値ある「情報」とは、インターネットの向こう側の世界から受け取るものではなく、身の回りの世界から自ら見つけ出すものであり、また、それらを整理し、発信できる力こそが情報活用能力であるということもできます。

そこで今回は、1学期の学習のまとめにも使える、「古くて新しい」「新聞づくり」の学習を紹介します。

○ 「何を書けばよいのか」わからない！

社会科見学や遠足、運動会など、子どもたちが1学期に直接体験したことは、貴重な「生情報」です。ところが、子どもたちはそれが「新聞の記事(内容)」の中心となる「情報」であるとは思っていません。そこで、次のように説明します。

- ・自分が初めて知った、体験したことを書く
- ・自分がそこで感じた、考えたことを書く

『自分が初めて知った』ということは、『他にもまだ知らない人がいる』＝『情報として伝える価値がある』ということだね。そして、それについて『どう思ったり考えたりしたのか』は、他の人は書くことができません。つまり、『その人にしか書けない情報』＝『オリジナル』ということになるのです

○ 「どう書けばよいのか」わからない！

体験したことのすべてを、時間順に書いて説明しようとして、大変な労力と時間を無駄にし、その結果、作文嫌いになってしまう子どもも多いようです。

実態に応じて、次の二つの方法を試してください。

① 「小見出しグランプリ」

・伝えたいことの中心をとらえる

教師が用意した記事(文章)、または、うまく書けずに困っている子どもの文章を提示して、「小見出し(大見出し)」をつけ合ってみましょう。中心となる大事な情報が何かを考える練習になります。

② 「ファミリー新聞社」の設立

4人グループで一つの新聞社を設立させ、割り付けの方法を説明した後に、4分の1ずつ分担して記事を書いて発行するように指示します。

・割り付けの仕方や、表現方法を工夫する

慣れてきたら、分担の仕方を「クイズ・インタビューコーナー」、「四コマ漫画」、「広告」、「社説」担当などと工夫したり、両面印刷にして分量を増やしたり、夏休み明けには「大きな壁新聞」にまとめさせたりするなど、「新聞社」を上手に活用してください。

○ 学年や学期に応じた指導の工夫

「新聞づくり」は、中学年の学習内容である「身の回りの社会的事象や自然について興味をもつこと」、「要点をとらえること」、「インタビューの仕方や表現を知ること」、「自分の考えを明らかにすること」などを総合的に指導することができる、大変に好都合な表現方法の学習ともいえます。

しかし、一番大切な指導のポイントは、「読み手の立場に立って、わかりやすく表現する」という相手意識の育成にあるのです。

「何のために(目的)」「何を(テーマ)」書くのか、また、「どこまで(読者の想定)」「どのように(表現の工夫)」書けばよいのかを、つねに意識させるようにしましょう。